

# 2022年度京大数学（理系）の解答

tt0801

2025年1月12日

## 1 大問1

### 1.1 問題

$5.4 < \log_4 2022 < 5.5$ であることを示せ。ただし、 $0.301 < \log_{10} 2 < 0.3011$ であることは用いてよい。

### 1.2 解答

$$\begin{aligned}\log_4 2022 &= \frac{\log_{10} 2022}{\log_{10} 4} \\ &= \frac{\log_{10} 2 + \log_{10} 1011}{2 \log_{10} 2} \\ &= \frac{1}{2} + \frac{\log_{10} 1011}{2 \log_{10} 2} \quad (= A \text{ とおく})\end{aligned}$$

である。ここで、 $\log_{10} 1011 > \log_{10} 1000 = 3$  より、

$$\begin{aligned}A &> \frac{1}{2} + \frac{3}{2 \log_{10} 2} \\ &> \frac{1}{2} + \frac{3}{2 \cdot 0.3011} \quad (\because \log_{10} 2 < 0.3011) \\ &= \frac{33011}{6022} \\ &> 5.4\end{aligned}$$

なので、 $\log_4 2022 > 5.4$  である。

また、 $\log_{10} 1011 < \log_{10} 1024 = 10 \log_{10} 2$  なので、

$$\begin{aligned}A &< \frac{1}{2} + \frac{10 \log_{10} 2}{2 \log_{10} 2} \\ &= \frac{1}{2} + 5 \\ &= 5.5\end{aligned}$$

である。よって、 $\log_4 2022 < 5.5$  となる。

以上より、 $5.4 < \log_4 2022 < 5.5$  が示された。

### 1.3 解説

$\log_{10} 2$  の評価式が与えられているので、 $\log_{10} 2$  を作ることを意識して式変形をする.

## 2 大問 2

### 2.1 問題

箱の中に 1 から  $n$  までの番号がついた  $n$  枚の札がある. ただし,  $n \geq 5$  とし, 同じ番号の札はないとする. この箱から 3 枚の札を同時に取り出し, 札の番号を小さい順に  $X, Y, Z$  とする. このとき,  $Y - X \geq 2$  かつ  $Z - Y \geq 2$  となる確率を求めよ.

### 2.2 解答

$(X, Y, Z)$  の組は, 全部で  ${}_nC_3$  通りであり, どの場合が出る確率も等しい.

$Y - X = 1$  となる  $(X, Y, Z)$  の組の場合の数は,  $2 \leq Y < Z \leq n$  であり,  $Y$  が定まれば,  $X = Y - 1$  と定まるので,  ${}_{n-1}C_2$  通りである.

同様に,  $Z - Y = 1$  となる  $(X, Y, Z)$  の組の場合の数は,  $1 \leq X < Y \leq n - 1$  であり,  $Y$  が定まれば,  $Z = Y + 1$  と定まるので,  ${}_{n-1}C_2$  通りである.

また,  $Y - X = 1$  かつ  $Z - Y = 1$  となる  $(X, Y, Z)$  の組の場合の数は,  $1 \leq X \leq n - 2$  であり,  $X$  が定まれば,  $Y = X + 1, Z = X + 2$  と定まるので,  ${}_{n-2}C_1$  通りである.

以上より,  $Y - X = 1$  または  $Z - Y = 1$  となる  $(X, Y, Z)$  の組の場合の数は,

$$\begin{aligned} {}_{n-1}C_2 + {}_{n-1}C_2 - {}_{n-2}C_1 &= 2 \cdot \frac{(n-1)(n-2)}{2} - (n-2) \\ &= (n-2)^2 \end{aligned}$$

である.

これは,  $Y - X \geq 2$  かつ  $Z - Y \geq 2$  となる事象の余事象なので, 求める確率  $P$  は,

$$\begin{aligned} P &= 1 - \frac{(n-2)^2}{{}_nC_3} \\ &= 1 - \frac{(n-2)^2}{\frac{n(n-1)(n-2)}{6}} \\ &= 1 - \frac{6(n-2)}{n(n-1)} \\ &= \frac{n(n-1) - 6(n-2)}{n(n-1)} \\ &= \frac{n^2 - 7n + 12}{n(n-1)} \\ &= \frac{(n-3)(n-4)}{n(n-1)} \end{aligned}$$

である.

## 2.3 解説

$n = 3, 4$  を代入して、求める確率が 0 であることから検算できる。また、 $n = 5$  の時も  $Y - X \geq 2$  かつ  $Z - Y \geq 2$  となるのは、 $(X, Y, Z) = (1, 3, 5)$  の組だけなので、求める確率が  $\frac{1}{{}_5C_3} = \frac{1}{10}$  になっているかでも検算可能。

## 3 大問 3

### 3.1 問題

$n$  を自然数とする。3 つの整数  $n^2 + 2$ ,  $n^4 + 2$ ,  $n^6 + 2$  の最大公約数  $A_n$  を求めよ。

### 3.2 解答

$(n^4 + 2) - (n^2 + 2) = n^2(n^2 - 1)$  なので、 $n^4 + 2$  と  $n^2 + 2$  の最大公約数は、 $n^2 + 2$  と  $n^2(n^2 - 1)$  の最大公約数に一致する。

$n^2 + 2$  と  $n^2$  の最大公約数について考える。 $n^2 + 2$  と  $n^2$  の公約数は、 $(n^2 + 2) - n^2 = 2$  を割り切る。ゆえに、 $n$  が偶数の時は、 $n^2 + 2$ ,  $n^2$  はともに偶数なので、最大公約数は 2 である。 $n$  が奇数の時は、 $n^2 + 2$ ,  $n^2$  はともに奇数なので、最大公約数は 1 である。

$n^2 + 2$  と  $n^2 - 1$  の最大公約数について考える。 $n^2 + 2$  と  $n^2 - 1$  の公約数は、 $(n^2 + 2) - (n^2 - 1) = 3$  を割り切る。ゆえに、 $n$  が 3 の倍数の時は、 $n^2 + 2$ ,  $n^2 - 1$  はともに 3 の倍数ではないので、最大公約数は 1 である。 $n$  が 3 の倍数でない時は、 $n^2 + 2$ ,  $n^2 - 1$  はともに 3 の倍数なので、最大公約数は 3 である。

$n^2$  と  $n^2 - 1$  は互いに素なので、 $n^2 + 2$  と  $n^2(n^2 - 1)$  の最大公約数は、 $n^2 + 2$  と  $n^2$  の最大公約数と  $n^2 + 2$  と  $n^2 - 1$  の最大公約数の積である。

以上より、 $n^2 + 2$  と  $n^2(n^2 - 1)$  の最大公約数  $B_n$  は、

$$B_n = \begin{cases} 2 & (n \text{ は偶数かつ } 3 \text{ の倍数, すなわち } 6 \text{ の倍数}), \\ 6 & (n \text{ は偶数だが } 3 \text{ の倍数ではない, すなわち } 6 \text{ で割って } 2 \text{ または } 4 \text{ 余る}), \\ 1 & (n \text{ は奇数かつ } 3 \text{ の倍数, すなわち } 6 \text{ で割って } 3 \text{ 余る}), \\ 3 & (n \text{ は奇数だが } 3 \text{ の倍数ではない, すなわち } 6 \text{ で割って } 1 \text{ または } 5 \text{ 余る}) \end{cases}$$

で与えられる。これが  $n^4 + 2$  と  $n^2 + 2$  の最大公約数に一致するので、 $A_n$  は、 $B_n$  と  $n^6 + 2$  の最大公約数である。

一方で、 $n^6 + 2 = n^2 + 2 + (n^2 + 1) \cdot n^2(n^2 - 1)$  と表せるので、 $n^6 + 2$  は、 $n^2 + 2$  と  $n^2(n^2 - 1)$  の最大公約数  $B_n$  で割り切れる。

以上より、 $A_n = B_n$  であるので、

$$A_n = \begin{cases} 2 & (n \text{ は } 6 \text{ の倍数}), \\ 6 & (n \text{ は } 6 \text{ で割って } 2 \text{ または } 4 \text{ 余る}), \\ 1 & (n \text{ は } 6 \text{ で割って } 3 \text{ 余る}), \\ 3 & (n \text{ は } 6 \text{ で割って } 1 \text{ または } 5 \text{ 余る}) \end{cases}$$

である。

### 3.3 解説

ユークリッドの互除法が背景にある問題である. 整数  $x, y, q, r$  について,  $x = qy + r$  と表せる時,  $x, y$  の最大公約数は  $y, r$  の最大公約数と一致する.

## 4 大問 4

### 4.1 問題

四面体  $OABC$  が

$$OA = 4, OB = AB = BC = 3, OC = AC = 2\sqrt{3}$$

を満たしているとする. 点  $P$  を辺  $BC$  上の点とし,  $\triangle OAP$  の重心を  $G$  とする. このとき, 次の各問に答えよ.

- (1)  $\overrightarrow{PG} \perp \overrightarrow{OA}$  を示せ.
- (2)  $P$  が辺  $BC$  上を動くとき,  $PG$  の最小値を求めよ.

### 4.2 解答

- (1) 一次独立なベクトル  $\overrightarrow{OA}, \overrightarrow{OB}, \overrightarrow{OC}$  に着目する.

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} &= \frac{|\overrightarrow{OA}|^2 + |\overrightarrow{OB}|^2 - |\overrightarrow{AB}|^2}{2} \\ &= \frac{16 + 9 - 9}{2} \\ &= 8, \\ \overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OC} &= \frac{|\overrightarrow{OB}|^2 + |\overrightarrow{OC}|^2 - |\overrightarrow{BC}|^2}{2} \\ &= \frac{9 + 12 - 9}{2} \\ &= 6, \\ \overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OC} &= \frac{|\overrightarrow{OA}|^2 + |\overrightarrow{OC}|^2 - |\overrightarrow{AC}|^2}{2} \\ &= \frac{16 + 12 - 12}{2} \\ &= 8.\end{aligned}$$

点  $P$  は辺  $BC$  上にあるので,  $0$  以上  $1$  以下の実数  $t$  を用いて

$$\overrightarrow{OP} = t\overrightarrow{OB} + (1-t)\overrightarrow{OC}$$

と表せる. 点  $G$  は  $\triangle OAP$  の重心なので,

$$\overrightarrow{OG} = \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} + \frac{1}{3}\overrightarrow{OP}$$

だから,

$$\begin{aligned}\overrightarrow{PG} &= \overrightarrow{OG} - \overrightarrow{OP} \\ &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} - \frac{2}{3}\overrightarrow{OP} \\ &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} - \frac{2}{3}t\overrightarrow{OB} - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{OC}\end{aligned}$$

である. 特に,  $\overrightarrow{OA}$ ,  $\overrightarrow{OB}$ ,  $\overrightarrow{OC}$  の係数が全て 0 になることはないので, 2 点 P, G は一致しない.

$$\begin{aligned}\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OA} &= \frac{1}{3}|\overrightarrow{OA}|^2 - \frac{2}{3}t\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OA} - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{OC} \cdot \overrightarrow{OA} \\ &= \frac{1}{3} \cdot 16 - \frac{2}{3}t \cdot 8 - \frac{2}{3}(1-t) \cdot 8 \\ &= 0\end{aligned}$$

で,  $PG > 0$ ,  $OA = 4 > 0$  なので,  $\overrightarrow{PG} \perp \overrightarrow{OA}$  が導けた.

(2)  $|\overrightarrow{PG}|^2$  の最小値について考える.

$$\begin{aligned}|\overrightarrow{PG}|^2 &= \overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{PG} \\ &= \overrightarrow{PG} \cdot \left( \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} - \frac{2}{3}t\overrightarrow{OB} - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{OC} \right) \\ &= -\frac{2}{3}t\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OB} - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OC}\end{aligned}$$

である.

$$\begin{aligned}\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OB} &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} - \frac{2}{3}t|\overrightarrow{OB}|^2 - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{OC} \cdot \overrightarrow{OB} \\ &= \frac{1}{3} \cdot 8 - \frac{2}{3}t \cdot 9 - \frac{2}{3}(1-t) \cdot 6 \\ &= -2t - \frac{4}{3}, \\ \overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OC} &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OC} - \frac{2}{3}t\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OC} - \frac{2}{3}(1-t)|\overrightarrow{OC}|^2 \\ &= \frac{1}{3} \cdot 8 - \frac{2}{3}t \cdot 6 - \frac{2}{3}(1-t) \cdot 12 \\ &= 4t - \frac{16}{3}\end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned}|\overrightarrow{PG}|^2 &= -\frac{2}{3}t\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OB} - \frac{2}{3}(1-t)\overrightarrow{PG} \cdot \overrightarrow{OC} \\ &= -\frac{2}{3}t \left( -2t - \frac{4}{3} \right) - \frac{2}{3}(1-t) \left( 4t - \frac{16}{3} \right) \\ &= 4t^2 - \frac{16}{3}t + \frac{32}{9} \\ &= 4 \left( t - \frac{2}{3} \right)^2 + \frac{16}{9} \\ &\geq \frac{16}{9}.\end{aligned}$$

等号成立条件は、 $t = \frac{2}{3}$  であり、これは  $0 \leq t \leq 1$  を満たす。このとき、点 P は辺 BC を 1:2 に内分する点である。また、 $PG = \sqrt{|\overrightarrow{PG}|^2} = \frac{4}{3}$ 。

以上より、点 P は辺 BC を 1:2 に内分する点である時、PG は最小値  $\frac{4}{3}$  をとる。

## 4.3 解説

ベクトルの問題では、基底（一次独立かつ、空間の任意のベクトルが基底のベクトルの一次結合で表せる）に着目して式変形しよう。本問では例えば、 $\{\overrightarrow{OA}, \overrightarrow{OB}, \overrightarrow{OC}\}$  が基底である。

## 5 大問 5

### 5.1 問題

曲線  $C: y = \cos^3 x$  ( $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ )、 $x$  軸および  $y$  軸で囲まれる図形の面積を  $S$  とする。  $0 < t < \frac{\pi}{2}$  とし、 $C$  上の点  $Q(t, \cos^3 t)$  と原点  $O$  および  $P(t, 0)$ 、 $R(0, \cos^3 t)$  を頂点に持つ長方形 OPQR の面積を  $f(t)$  とする。このとき、次の各問に答えよ。

(1)  $S$  を求めよ。

(2)  $f(t)$  は最大値をただ 1 つの  $t$  でとることを示せ。そのときの  $t$  を  $\alpha$  とすると、 $f(\alpha) = \frac{\cos^4 \alpha}{3 \sin \alpha}$  であることを示せ。

(3)  $\frac{f(\alpha)}{S} < \frac{9}{16}$  を示せ。

### 5.2 解答

(1) 求める面積  $S$  は、

$$\begin{aligned} S &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^3 x \, dx \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} (1 - \sin^2 x) \cos x \, dx \\ &= \left[ \sin x - \frac{1}{3} \sin^3 x \right]_0^{\frac{\pi}{2}} \\ &= \frac{2}{3} \end{aligned}$$

である。

(2)  $f(t) = t \cos^3 t$  である。

$$\begin{aligned} f'(t) &= \cos^3 t - 3t \cos^2 t \sin t \\ &= \cos^2 t (\cos t - 3t \sin t) \end{aligned}$$

$0 < t < \frac{\pi}{2}$  において,  $\cos^2 t > 0$  なので,  $f'(t)$  の 0 との大小関係は  $g(t) := \cos t - 3t \sin t$  の 0 との大小関係と一致する.

$$g'(t) = -\sin t - 3\sin^2 t - 3t \cos t < 0$$

であるので,  $g(t)$  は  $0 < t < \frac{\pi}{2}$  において単調減少である.

$$\lim_{t \rightarrow +0} g(t) = 1 > 0, \quad \lim_{t \rightarrow \frac{\pi}{2} - 0} g(t) = -\frac{3}{2}\pi < 0$$

であるから中間値の定理より  $g(\alpha) = 0$  となる  $0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$  となる  $\alpha$  が存在する.  $f(t)$  の増減表をかくと,

$x$	0		$\alpha$		$\frac{\pi}{2}$
$g(x)$		+	0	-	
$f'(x)$		+	0	-	
$f(x)$		$\nearrow$	最大	$\searrow$	

だから,  $f(t)$  は最大値を  $t = \alpha$  でのみ取る.  $g(\alpha) = 0$  すなわち,

$$\cos \alpha - 3\alpha \sin \alpha = 0$$

に注意すると,  $\alpha = \frac{\cos \alpha}{3 \sin \alpha}$  であるから,

$$\begin{aligned} f(\alpha) &= \alpha \cos^3 \alpha \\ &= \alpha \cos^3 \alpha \\ &= \frac{\cos^4 \alpha}{3 \sin \alpha} \end{aligned}$$

となる.

(3)

$$\begin{aligned} g\left(\frac{\pi}{6}\right) &= \frac{\sqrt{3}}{2} - 3 \cdot \frac{\pi}{6} \cdot \frac{1}{2} \\ &= \frac{2\sqrt{3} - \pi}{4} \\ &> 0 \end{aligned}$$

であるから,  $\frac{\pi}{6} < \alpha \left( < \frac{\pi}{2} \right)$  である. ゆえに,

$$\begin{aligned} f(\alpha) &= \frac{\cos^4 \alpha}{3 \sin \alpha} \\ &< \frac{\cos^4 \frac{\pi}{6}}{3 \sin \frac{\pi}{6}} \\ &< \frac{\left( \frac{\sqrt{3}}{2} \right)^4}{3 \cdot \frac{1}{2}} \\ &= \frac{3}{8} \end{aligned}$$

である. 両辺  $S = \frac{2}{3}$  で割って,

$$\frac{f(\alpha)}{S} < \frac{9}{16}$$

を得る.

### 5.3 解説

$x, y$  についての有理関数  $Q(x, y)$  について,  $Q(\cos x, \sin x)$  は原理的に高校数学の範囲で積分を計算できる.  $Q(x, y)$  の形に応じて様々なテクニックがあるので, 復習しよう.

## 6 大問 6

### 6.1 問題

数列  $\{x_n\}, \{y_n\}$  を次の式

$$x_1 = 0, \quad x_{n+1} = x_n + n + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_n}{3} \right) \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

$$y_{3m+1} = 3m, \quad y_{3m+2} = 3m + 2, \quad y_{3m+3} = 3m + 4 \quad (m = 0, 1, 2, \dots)$$

により定める. このとき, 数列  $\{x_n - y_n\}$  の一般項を求めよ.

### 6.2 解答

任意の 0 以上の整数  $m$  に対して, 次の命題  $P(m)$  が成立することを, 数学的帰納法で証明する.

$P(m)$ :  $x_{3m+1}, x_{3m+2}, x_{3m+3}$  はいずれも整数で, 3 で割った余りはそれぞれ 0, 0, 1 である.



(i)  $m = 0$  の時,  $x_{3 \cdot 0+1} = x_1 = 0$  は整数. 3 で割った余りは 0.

$$\begin{aligned} x_{3 \cdot 0+2} &= x_2 \\ &= x_1 + 1 + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_1}{3} \right) \\ &= 0 + 1 + 2 \cos 0 \\ &= 3. \end{aligned}$$

これは整数であり, 3 で割った余りは 0.

$$\begin{aligned} x_{3 \cdot 0+3} &= x_3 \\ &= x_2 + 2 + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_2}{3} \right) \\ &= 3 + 2 + 2 \cos (2\pi) \\ &= 7. \end{aligned}$$

これは整数であり, 3 で割った余りは 1.

よって,  $m = 0$  では命題  $P(m)$  が成立.

(ii) ある 0 以上の整数  $m$  に対して,  $P(m)$  が真であると仮定する. この時,

$$\begin{aligned} x_{3(m+1)+1} &= x_{3m+4} \\ &= x_{3m+3} + (3m+3) + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_{3m+3}}{3} \right) \\ &= x_{3m+3} + (3m+3) + 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} \right) \\ &= x_{3m+3} + 3m - 1. \end{aligned}$$

$x_{3m+3}$  は 3 で割って 1 余る整数なので,  $x_{3(m+1)+1}$  は整数であり, 3 で割った余りは 0 である.

$$\begin{aligned} x_{3(m+1)+2} &= x_{3m+5} \\ &= x_{3m+4} + (3m+4) + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_{3m+4}}{3} \right) \\ &= x_{3m+4} + (3m+4) + 2 \cos 0 \\ &= x_{3m+4} + 3m + 6. \end{aligned}$$

$x_{3m+4}$  は 3 で割り切れる整数なので,  $x_{3(m+1)+2}$  は整数であり, 3 で割った余りは 0 である.

$$\begin{aligned} x_{3(m+1)+3} &= x_{3m+6} \\ &= x_{3m+5} + (3m+5) + 2 \cos \left( \frac{2\pi x_{3m+5}}{3} \right) \\ &= x_{3m+5} + (3m+5) + 2 \cos 0 \\ &= x_{3m+5} + 3m + 7. \end{aligned}$$

$x_{3m+5}$  は 3 で割り切れる整数なので,  $x_{3(m+1)+3}$  は整数であり, 3 で割った余りは 1 である.

以上より任意の 0 以上の整数  $m$  に対して, 命題  $P(m)$  が成立する.

$n$  が 2 以上の整数の時,

$$\begin{aligned} x_n &= x_1 + \sum_{k=1}^{n-1} \left\{ k + 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_k \right) \right\} \\ &= \frac{n(n-1)}{2} + 2 \sum_{k=1}^{n-1} \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_k \right) \end{aligned}$$

である.  $z_n = 2 \sum_{k=1}^{n-1} \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_k \right)$  とおく. また,  $z_1 = 0$  とおけば, 全ての自然数  $n$  について,  $x_n = \frac{n(n-1)}{2} + z_n$  が成立する.  
 $m$  が自然数の時,

$$\begin{aligned} z_{3m+1} &= 2 \sum_{k=1}^{3m} \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_k \right) \\ &= 2 \sum_{k=0}^{m-1} \left\{ \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_{3k+1} \right) + \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_{3k+2} \right) + \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_{3k+3} \right) \right\} \\ &= 2 \sum_{k=0}^{m-1} \left( 1 + 1 - \frac{1}{2} \right) \\ &= 3m \\ &= y_{3m+1}, \\ z_{3m+2} &= z_{3m+1} + 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_{3m+1} \right) \\ &= 3m + 2 \\ &= y_{3m+2}, \\ z_{3m+3} &= z_{3m+2} + 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_{3m+2} \right) \\ &= 3m + 2 + 2 \\ &= 3m + 4 \\ &= y_{3m+3} \end{aligned}$$

である. これは,

$$\begin{aligned} z_1 &= 1 = y_1, \\ z_2 &= 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_1 \right) = 2 = y_2, \\ z_3 &= z_2 + 2 \cos \left( \frac{2\pi}{3} x_2 \right) = 2 + 2 = 4 = y_3 \end{aligned}$$

なので,  $m = 0$  に対しても成立する.

以上より, 全ての自然数  $n$  に対して,  $z_n = y_n$  なので,

$$x_n - y_n = \frac{n(n-1)}{2}$$

が全ての自然数  $n$  に対して, 成立する.

### 6.3 解説

いくつか  $x_n$  を具体的に計算すれば,  $x_n$  は整数であることが期待できる. この時,  $2 \cos \left( \frac{2\pi x_n}{3} \right)$  の取りうる値は  $x_n$  を 3 で割った余りによって 2 か -1 のいずれかなので,  $x_n$  の 3 の剰余に着目すれば周期的になっていることが見抜けるだろう.